

## 佐土原キリスト教会 2023年1月15日礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 14章 1～9節

説教題：良いことをしてくれた

カナダで出会った1組のご高齢のご夫妻のことを良くご紹介しますが、兄弟の方が良くこう言っておられました。「私は神に愛された。その愛された愛で人を愛し返す、それが私の信仰です」。この方は、仕事で追い詰められた状況に置かれた時に、ある本を通して「一遍キリスト教を試して見なさい」という言葉に出会って教会に導かれました。そこから人生が変えられました。色々な恵みを経験して行かれました。「愛をもらった」と表現されました。それで「キリストが下さった愛に対して、人を愛することで応えるのが、私の信仰の在り方です」と言われたのです。イエスが命がけで与えて下さった「救い—(神との関係)」、それにどのように応えるか、それはそれぞれのキリスト者にとって大きなテーマだろうと思います。そして今日の個所も、そのようなテーマを扱う個所になります。

いよいよ「マルコ福音書」は、14章～15章で「イエスの十字架」について記します。今日の個所は、その直接的な導入となる部分です。1節に「さて、過越の祭りとなしパンの祝いが二日後に迫っていたので…」(1)とあります。「過越の祭り」というのは、「出エジプト記」が伝えることです。この時から1300～1400年ほど前、イスラエルの人々が、奴隷の地エジプトから神に守られて逃げ出すことになった時、神は指導者モーセに命じて「イスラエルの人々は皆、子羊を屠って家の門のところに子羊の血を塗っておくように」命じられました。夜になって「死の天使」がやって来て、羊の血が塗ってある家だけを過ぎこして、羊の血の塗っていない家の子を撃ちました。イスラエルを解放しようとしないう頑ななパロ(王)に対する神の裁きでした。「その混乱に乗じて、イスラエルはエジプト脱出に成功した」という、その出来事を記念して祝うのが「過越しの祭り」でした。「過越しの祭り」の後には「となしパンの祝い(祭り)」が7日間続きました。これも「出エジプト」を記念するものでした。2つの祭りは一緒に始まり、「過越しの祭り」だけが1日で終わり、後が「となしパンの祝い」になります。

宗教のリーダー達は、はっきりとイエス様を殺すことを決めていました。後は「いつ実行するか」の問題でした。2節に「彼らは、『祭りの間はいけない。民衆の騒ぎが起こるといけないから』と話していた」(2)とあります。なぜ「祭りの間はいけない」のか。ただでさえ暴動が起こり易い土地柄です。それが、「過越の祭り」は「イスラエルがエジプトから脱出した」という民族最大の歴史的出来事を振り返る時です。民族意識が高まるのです。それは、人々の心を「今度は現代のエジプトであるローマからの脱出」という思いに至らせ、人々が興奮する時なのです。あちこちから多くの人も集まって来ています。普段、力でエルサレム住民(ユダヤ人)を押さえているローマ兵士とも、この時は一触即発の雰囲気になります。もし暴動が起きれば、ローマの軍隊が鎮圧に動きます。そしてユダヤ人社会の指導者が責められます。今与えられている自治権さえ奪われかねません。だから指導者は、祭りが終わるのを待とうとしたのです。しかしいずれにしても、それは時期の問題であって、指導者達は、イエスの死のために備えをしていました。それが、この個所を覆っている状況です。

しかしそういう中で、全く別の形でイエスの死に備えをする女性がここに登場します。イエス様と弟子達は、ベタニヤの「ツアラアトに冒された人シモン」と呼ばれる人の家にいました。大勢集まった巡礼者を、エルサレムだけでは収容出来ませんから、近くのベタニヤやベテパゲの村も巡礼者の宿となりました。イエス様の常宿は、ベタニヤのこの家でした。「ツアラアトに冒された人シモン」が誰なのか、分りません。もしかしたらマルタとマリヤとラザロのお父さんが、「ツアラアトに冒された人シモン」だったかも知れません。そのシモンの家で食事をしておられた時、1人の女がナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊してイエス様の頭に注ぎかけました。もしシモンが、マルタ達3姉弟の父親なら、この女は、「マルタとマリヤ」のマ

リヤだったかも知れません。

問題は、なぜ彼女がこのようなことをしたのか、ということです。そこに「すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。『何のために、香油をこんなにむだにしたのか。この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに』。そして、その女をきびしく責めた」(4)とあるように、「ナルドの香油」というのは、インドから輸入されていた高価な香油だったそうです。通常、頭に塗ったり、また死体に塗ったりもしたそうですが…。それでも、壺に入っているものを全部注ぎかけるようなことはしなのです。しかも「300 デナリ」分です。当時、労働者の1日分の賃金が1デナリでした。だから約1年分の賃金にあたる額の香油です。それを注いでしまいました。ある説教者は、この場面を表現して「異様なことが起きた」と言っています。確かに異様な出来事です。なぜ彼女は、こんなことをしたのでしょうか。

「何人かの者が憤慨して」とありますが、「マタイ福音書」には「弟子たちはこれを見て、憤慨して言った」(マタイ 26:8)とあります。弟子達には、彼女のしたことが理解できなかったのです。だから彼女を厳しく責めました。弟子達の言う「この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに」、それは確かに正論かも知れません。「貧しい人たちに施す」、そういう使い方もあるでしょう。そしてその方が、イエスが教えて来られた「隣人への愛」の教えに適っているかも知れません。

しかしイエスは、弟子達とは全く違う反応をされます。イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです。貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます…しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう」(6~9)。イエスは言われます。「わたしのために、立派なことをしてくれたのです」。そしてその「立派なこと」の中身を2つ語られます。

1つは7節の「わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません」(7)ということです。貧しい人に施すことは、それは正しいこと、素晴らしいことでしょう。しかしイエス様は、ここではっきりと(8節)「埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです」(8)と言われます。祭司長や律法学者たちは、「祭りの間はいけない」と言いました。しかし「マタイ福音書」の平行箇所では、イエスは「2日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます」(マタイ 26:2)と言われ、「過越の祭り」の時に死のうとしておられるのです。この日は水曜日です。金曜日には十字架に架かられます。先程「女がしたことを『異様な出来事だ』と言った説教者がいた」と申し上げましたが、それ以上に異様なのが、イエス様が死のうとしておられることです。しかも指導者は「祭りが終わってからにしよう」としているのに、イエスは、それを手前に引き寄せようとしておられるのです。なぜでしょうか。

「過越し」に屠られた羊の血がイスラエルの人々を死の使いから救ったように、イエス様は、「死の力」から人々を守るためにご自分の血を流そうとしておられたのです。死の力が私達のところを過ぎ越す、子羊の血に勝る永遠の砦がここに造られるのです。しかしイエス様の死の時、一体誰がそのことに感謝したのでしょうか。弟子達でさえ、「無駄遣いだ」と言ったのです。私は、弟子達が後にイエス様の「十字架と復活」の証人となった時、「自分達はイエス様が死のうとしておられる直前まで一緒にいたのに、何も出来なかった、イエス様の死に応えることが何も出来なかった」、そのことを情けなく思ったと思います。でもこの女は、イエス様の死に感謝するかのようこのことをしたのです。「弟子達は、そのことをどんなに救われた思いで思い出しただろう、語つただろう」と思うのです。いずれにしてもイエスは、彼女が時宜に適ったことをして

くれたことを喜ばれたのです。

もう1つは、イエスは(8節)「この女は、自分にできることをしたのです」と言っておられます。「新共同訳」は「この人はできるかぎりのことをした」(8)と訳しています。確かに1年分の生活費を一瞬で使い果たしてしまうことは浪費かも知れません。でも、それは彼女に出来る精一杯のことでした。しかしイエスは、彼女のためにも命を捨てようとしておられました。彼女は、それに応えようとするなら、こうせざるを得なかった。そしてこれが、彼女がイエス様に出来る全部だったのです。ある神学者は言います。「十字架を前にして、イエスが真に出会ったのは、2人の女性だけだった」。その1人は、神殿に2レプタ(200円程)を捧げた女性です。そのお金は彼女の生活費の全てでした。生活費の全部を神に捧げてしまったこの女を見て、イエス様はどれだけ励まされたことでしょうか。そしてもう1人が、この「出来る限りのことをした女性」です。この2人だけは、本当に意味で十字架に向かうイエス様を励ましたのです。

最初の質問に帰りましょう。彼女はなぜこんなことをしたのか。結局、確かなことは分かりません。でも、彼女は何らかの理由でイエス様が死のうとしておられることを、しかも人を愛するために、彼女を愛するために、死のうとしておられることが分った、感じたのではないのでしょうか。宗教改革者カルバンは言っています。「この婦人は聖霊の息吹に導かれて、キリストへの義務を果たさないわけにはいなくなかった」。彼女も、何で自分がこんなことをしたのか、はっきり分らなかったかも知れません。しかし、キリストが自分達を愛するために死のうとしておられる、それを感じた時、それを知った時に、聖霊に押し出されるように、そのキリストの愛に応えようとした、応えざるを得なくなかったのです。そして彼女は、そういう仕方でも精一杯イエス様を愛そうとしたのです。イエスの愛に応えようとしたのです。イエスの愛を褒め称えようとしたのです。それが、この一見愚かに見える、浪費に見える行いだったのです。そしてイエス様は、彼女の思いを知って、その愛を、愛の奉仕を喜んで受け止められたのです。

この個所は、私達に何を語るのでしょうか。ジョン・ウェスレーという英国の有名な説教者であり、神学者であった人がいます。彼は、結果的に英国国教会の外にメソジスト教会を作ることになりましたが…。彼が、ある日、夢を見ました。彼は天国の門の所にいました。そして門番の天使に尋ねるのです。「天国には英国国教会の信者はいますか」。天使は「いいえ」と答えます。彼は「やっぱり」と思います。「ではメソジストの信者はいますか」。天使は答えます。「いいえ」。彼はショックを受けます。真っ青になっている彼に、天使は言います。「私は、ここに来た人々が、どこの教派に属していたかなど全く知りません。なぜなら天国では教派を問題としないからです」。「そうすると、ここに入れて頂ける人は、どのような人達なのでしょう」。天使は言いました。「ただ一つ、主を心から愛している人々です」。

この個所が私達にチャレンジすることは、「あなたはイエス様を愛していますか」ということです。ある牧師がこう言いました。「信仰生活は、なりふり構ってられないものです。この婦人のように、はたの人の思惑などは、全然問題にしないものであると思います。『信仰はあまり熱狂的にならない方がいい』と分別くさいことを言う人がいます。しかし、信仰はただ神のことだけを考える生活です。それならば、時としては、人の目に愚かしいと思われることもあるに違いありません…信仰とは分別を忘れるほどに、人間としてもまことに愚かだと思われぬようなこともするのです。それほど激しく燃えるものなのです」。信仰には、一方で「この世的な常識」も必要です。世の常識が通用しない世界であってはいけないと思います。しかしまた「信仰の世界」は、「世の常識」だけではいけないと思います。だいたい「愛」ということであれば、計算では割り切れない。親が子を愛する愛もそうでしょう。計算尽くではない。逆に、計算尽く、勘定尽くのものであれば、それは「愛」とは言わないでしょう。私達はどのような仕方でもイエス様を愛しているのでしょうか。もし私達が、自分でも「人には愚かに見えるかもな…」と思うような愛し方をしたら、その時はイエスが言って下さいます。「(あなたは)わたしに良いことをしてく

れたのだ…(あなたは)できるかぎりのことをした」。イエス様は、勘定尽くでない、計算尽くでない愛で、私達を愛して下さいました。使徒パウロは「十字架のことばは…愚かである」(1 コリント 1:18)と言いました。イエス様も愚かになって下さいました。私達も、人が「愚かだ」と言うくらいのも—(もちろん、出来る範囲のことですが)—イエス様に対する愛をイエス様に注ぎ出すことが、時にあって良いのではないのでしょうか。「ヨハネ福音書」14章23節に「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります」(ヨハネ 14:23)とありますから、それは「愚かと思われるくらい御言葉に従う」という形を取るかも知れない。自分を追って来て、氷が割れて、池に落ち込んだ官憲を助けた「ディレク・ヴィレムス」のことを思い出します。色々な仕方があるのでしょうか。しかしいずれにしても、私達の信仰にも、そのような熱気を帯びた「愛」がありたいものだと思うのです。

そして実は、弟子達は「イエス様に愛を注ぐよりも貧しい人に施せ」と言いましたが、イエス様を愛するという事は、隣人を愛することと相反することではないのです。マザー・テレサは、インドのコルコタで貧しい人々を愛し、彼らがせめて人の愛に包まれて死んで行けるように、と奉仕を続けました。その他にも色々な活動を展開しましたが、でも彼女は、「社会福祉活動」をしようとしたのではない、彼女は「神に仕えようとした」のです。彼女の言葉です。「この地上で神と共にある幸せを享受するためには、次のようなことが必要となります。神が愛されているように人を愛すること…そして貧しい人々、苦しんでいる人々の中におられる神に触れること」。彼女は、神を愛そうとしたのです。それが、彼女にとっては貧しい人に仕えることだったのです。「アーミッシュの赦し」の話を何度もしています。アーミッシュの人々が、自分達の村の学校に侵入して、子供達を殺して、自分も自殺した犯人の家族に「赦し」を申し出、「あなた方も家族を亡くしました。共に悲しみを分かち合いましょう」と言ったという話です。しかし、彼等も「人を赦す」ことが目的ではなかったのです。イエス様の愛に応えることが目的だったのです。それが結果として「赦し」という形になったのです。「なりふり構わず神を愛する時に、私達はなりふり構わず人のためにも生きることが出来る」、これはマザー・テレサやアーミッシュの人々が教えてくれる真理ではないのでしょうか。使徒パウロは言いました。「たとい私が…あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません」(1 コリント 13:2~3)。

キリスト教には、信仰生活には、「愛」という要素があるべきだと思います。信仰生活に「愛する」ということが無くなった時、それは私達の信仰が何かおかしくなっている時だと思います。私達は、信仰生活に「神への愛、イエスへの愛、人への愛」という要素を育てて行きたいと思います。そして、その愛に生きて行けるように祈り求めて行きたいと願います。